

2026-2027

■本日のロータリーソング
それでこそロータリー

WEEKLY BULLETIN

10月8日(木) 第12号
第3175回 例会

札幌東ロータリークラブ TODAY'S PROGRAM

10月、米山月間によせて

公益財団法人米山梅吉記念館 学芸員 市川真理氏



道産子からメダリストを。～夢を仕組みに変える挑戦～

NPO法人Dosapo代表理事 伊藤孔一氏 TEAM BUMPS 佐藤青葉 選手

皆さんは「フリースタイルスキー・モーグル」という競技をご存じでしょうか。今年2月、札幌出身の島川拓也選手がオリンピックで4位入賞を果たし、大きな注目を集めました。サラリーマンとして働きながら競技を続けてきたという異色の経歴もあり、記憶に残っている方も多いかと思います。その直後、富山県で5年ぶりとなるワールドカップ日本大会が開催されました。そこで行われた3位決定戦では、島川選手と、私たちDosapoでトレーニングを続けている川岡士真選手による札幌出身者同士の対決が実現しました。モーグルには、今年からオリンピックの正式種目として採用された「デュアルモーグル」という競技があります。二人の選手が並んで滑り、スピード、ターン、エアなどを競う、非常に迫力のある競技です。

私がスキーを始めたのは2歳の頃でした。最初は親に連れられて、嫌々始めたスキーでしたが、気がつけばスキーが大好きになっていました。運動神経が良い方ではなく、体育の成績も決して良くありませんでした。それでも、スキー学習だけはいつも一番。コブを滑ること、そしてジャンプすることが好きで、「こんな競技はないのかな」と思っていたところ、手稲のスキースクールでモーグルという競技を知りました。その後、アルペールビルオリンピックでモーグルを見て、「これしかない」と思ったことを覚えています。しかし、当時はインターネットもなく、モーグルのチームを探すだけでも一苦労。ようやく1年かけてチームを見つけました。それから決して順風満帆ではありませんでした。運動神経に自信がないうえ、本番に弱く、怪我も多い。なかなか成績が出ず、周囲の友人たちが推薦で進学したり、スポンサーが付いたりする中で、「自分だけが取り残されている」と感じることもありました。それでも、夢だけは諦めませんでした。

親や先生からは「スキーでは食べていけない。きちんと学校に行って、きちんと働きなさい」と言われました。自分でも反発しながら、当時はそれ以上の道を考えることができず、いわゆる「親の敷いたレール」の上を歩んでいました。藻岩高校、室蘭工業大学へ進学。怪我が重なり、高校3年から大学2年まではシーズンを棒に振りました。大学3年でようやく全日本選手権に初出場。大学4年でも成績が伸び、「まだいける」と思った矢先、再び怪我。医師からは競技を辞めることを勧められ、私は悩んだ末、札幌市役所に就職することを選びました。そして、そのタイミングでチームコー

チが別のチームに移籍することになり、選手引退と同時に所属していたチームのコーチになりました。ところが、選手を辞めてからの生活は、正直なところ面白くありませんでした。冬が来ることさえ嫌になり、市役所での生活にも「自分には合わない」「何か物足りない」という思いを抱くようになりました。そんなある日、3年ほど経った頃、久しぶりに一人でパウダーを滑りました。楽しかった。そこで改めて、「やっぱりスキーは楽しい」と気づきました。

そこから、コーチとしてもう一度、本気でスキーに向き合ってみようと思いました。勉強し、選手と真剣に向き合うようになり、次第にコーチという仕事にのめり込んでいきました。そして2010年、日本代表ジュニアコーチに就任。遠征もどんどん増え、市役所との両立が難しくなり、2013年7月に市役所を退職しました。その後、応援してくれる民間企業に所属しました。代表コーチとしても結果を残し、2014年ソチ五輪終了後に、「2018年は伊藤君に行ってもらおう」とお言葉をいただきました。しかし、その年の7月、急遽そのトップが解任。私も突然コーチを外されることに。また、所属会社の社長とも考えが合わず、2014年10月には無職となりました。しかし、ちょうどその頃、2026年札幌オリンピックへの機運が高まり始めていました。

「道産子からメダリストを」当時の北海道のモーグルは決して強い地域ではありませんでしたし、ワールドカップを転戦する選手もいない。「札幌でオリンピックが開催されるとしても、地元には選手がいなければ盛り上がりません」とそんな思いから掲げたのが、「道産子からメダリストを」という言葉でした。そして、NPO法人Dosapoを設立しました。しかし、最初から順調だったわけではありません。選手はなかなか増えず、周囲からは「選手からお金を取り始めた」と、ボランティア文化の根強いスキー界から批判されることもありました。それでも活動を続け、2017年4月に開催したイベントをきっかけに、少しずつ選手が集まり始めました。メディアにも取り上げていただき、活動を知ってもらえるようになりました。少しずつ選手が増え、成績も出てようやく軌道に乗り始めました。そして2022年、北京オリンピック後にはメダリストを招いたイベントを開催。さらにDosapoの知名度が広がり、モーグルを始める子も増えました。現在では、チームの選手も増え、着実に結果も出始めています。ジュニアオリンピック優勝、世界ジュニア優勝、全日本選手権優勝、ユースオリンピック3位、ワールドカッ

持続可能なインパクトを生み出そう

2026-2027 年度 国際ロータリー会長のメッセージ

国際ロータリー会長:オンラインカ・ハキム・ババラ

THE ROTARY CLUB OF SAPPORO-EAST WEEKLY BULLETIN

第2510地区

Rotary

札幌東ロータリークラブ



ブ3位、世界選手権出場。そして、残す目標は「オリンピック」です。目指すのは2030年。

夢を「仕組み」に変える。しかし、ここまで来るには多くの苦労がありました。現在は雪不足からワールドカップ選手でなくとも、毎年12月にはカナダに滑り込みに行きます。そのほか、国内遠征や出場しなければならない大会が急遽海外で開催されるなど、アジア各国を転戦することもあります。当然ながら、活動には大きな費用がかかります。これまで、選手個人のスポンサー、Dosapoのスポンサー、イベントスポンサー、寄付や補助金など、さまざまな形で支援をいただけてきました。それでも、なかなか長く続く支援にはつながらず、資金は十分とは言えません。これはDosapoだけの問題ではありません。今年3月に開催されたワールドカップでさえ、十分な資金を集めることが難しく、赤字だったと聞いております。ただ、ワールドカップ、オリンピックで結果を残した選手たちは違います。そこに行くまでが非常に困難。これがモーグルの現状です。だからこそ、私たちはこの状況を変えていきたい。一人の選手を応援するだけではなく、北海道から世界で活躍する選手を継続的に生み出していく。そのための「仕組み」をつくりたいと考えています。

「道産子からメダリストを。」この夢を、夢のままで終わらせないために、まずは、モーグルという競技を実際に観ていただきたいと思います。来年、ぜひ大会やイベントに足を運んでください。選手たちが雪上で挑戦する姿を、是非その目で観てください。そして、北海道から世界へ挑戦する若者たちの未来を、一緒につくっていただければ幸いです。

佐藤青葉選手へのインタビュー

Q1 モーグルを始めたきっかけは

ももとはアルペンスキーに取り組んでいましたが、9歳のときに父に連れられて、初めてコブのある斜面を滑ったことがモーグル競技と出会ったきっかけでした。その後、オリンピック選手から直接指導を受けられる「ワールドモーグルキャンプ」というイベントに参加しました。そのイベントで実際に教えてもらう中で、コブを滑る楽しさを実感し、「もっとコブを上手く滑れるようになりたい」という思いからモーグルに本格的に取り組むようになりました。

Q2 どのような気持ちで競技に取り組んでいたか

競技を始めた当初は、コブを思うように滑ることができず、恐怖心と戦いながら練習する日々が続きました。また小学生の頃は、大会に出場しても順位は常に下位で、思うような結果を残せず、悔しい気持ちを抱えていました。なんども辞めてしまいたいと思っていたそんな中、中学1年生の頃、初めて大会で入賞することができ、これまで努力してきたことが、初めて結果として表れた瞬間でした。そのときに感じた「努力が報われる嬉しさ」や「目標を達成する喜び」が、競技を続ける大きな原動力となり、そこからさらにモーグルにのめり込んでいきました。

Q3 将来の夢は

今シーズンの1番の目標は世界ジュニア選手権という

大会に出場し優勝することです。この世界ジュニアの大会で優勝することによりワールドカップへの道につながるのでこの目標を達成できるようにしていきたいです。また最終目標は2030年のオリンピックでメダルを獲得することです。その目標を達成するためにもまずはワールドカップの出場権利を獲得していきたいと思っています。そして自分が成績を残していく事で、秀でたセンスや特別な才能が無くても努力し続けること、挑戦し続けることで世界中のトップレベルのアスリート達とも戦っていけるという事を証明していきます。その姿を多くの人に見てもらうことで勇気を与えられる存在になりたいと思っています。

Q4 今、頑張っていることについて

現在は、2030年のオリンピックでメダルを獲得するという目標に向けて、競技に集中して取り組んでいます。そのため大学への進学を断念し、資金集めと練習を行いながら実力を磨いています。そして、競技を続けていくためには遠征費や用具代など多くの費用が必要になるため、資金面でも自分にできることに挑戦しています。スポンサー探しやアルバイト、ファンクラブの開設など、まだ思うような結果につながっていないことも多いですが、試行錯誤を繰り返しながら活動しています。競技力を高めることはもちろん、競技を続けるための環境を自分自身でつくっていくことも、今の自分が頑張っていることの一つです。

Q5 一番のアピールポイントは

「挑戦し続ける行動力」です。私は、何か新しいことに挑戦するとき、最初からうまくできるタイプではありませんでした。うまくいかないことや壁にぶつかることも多く、そのたびに悔しい思いをしてきました。しかし、その壁を乗り越えていく過程が、自分自身を成長させるきっかけになると考えています。これまでモーグルを続ける中でも、思い通りの結果が出なかったり、力不足を感じたりすることが何度もありました。そうしたときも途中で諦めるのではなく、自分に何が足りないのかを分析し、周りの方からアドバイスをもらいながら、実際の行動に移すことを大切にしてきました。これからも、失敗や不安を恐れるのではなく、自分から挑戦することを大切にしていきたいです。そして、挑戦を積み重ねることで自分自身を成長させ、いつか周りの方に「応援してよかった」と思ってもらえるような人間になりたいと思っています。

